

新約聖書 マルコによる福音書 7章1節—8節、14節—15節、21節—23節（新共同訳）

¹ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエスのもとに集まった。²そして、イエスの弟子たちの中に汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がいるのを見た。³——ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、⁴また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある。——⁵そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」⁶イエスは言われた。「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。『この民は口先ではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。』⁷人間の戒めを教えとしておしえ、／むなしくわたしをあがめている。』⁸あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」

¹⁴それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。¹⁵外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

²¹中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、²²姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、²³これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「外からの言葉」

ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守り、食事の前に念入りに手を洗いました。これは、衛生上からというよりも、宗教的な意味からなされました。食事の前に手を洗わないということは、その人間が宗教的に不浄であり、汚れていることを意味しました。

今から約2千年前の当時のユダヤ人たちは、強大なローマ帝国の植民地支配下にありました。そして、その状況下で、どのようにユダヤ人の信仰・アイデンティティ（固有性）を保持して生き延びていくかという問題に直面していました。律法解釈の違いで、ユダヤ人同士での議論・ぶつかりあいも起きていました。時代に合わせて生活様式が変わるなか、新しい状況に適用可能な仕方でも律法を解釈することが、ファリサイ派の人々の努力していたことでした。

そこでファリサイ派の人々は、安息日や食物規定を中心とする律法遵守を通して、民族的な独自性を守ろうとしました。他の民族にはない、安息日の掟や、食べて良いもの・悪いものの掟を守ることで、自分たちユダヤ人のアイデンティティを保とうとしたのです。しかしそれが、特に、農村に住む律法を守れない人々への抑圧・差別に繋がりました。困窮する人は、生きるだけで精一杯で、

宗教的な正しさを実践することができなかったからです。そして、神の民としての清い生活・儀式的な清浄さを重視する概念が、貧しい民衆への蔑視・排除・搾取に使われていたのです。

イエスは、このような風潮に抵抗しました。彼は、「罪人」とされた人々と食事をし、安息日に人を癒します。このようなイエスの在り方が、律法を無視しているように、人々からは見られました。

エルサレムから来たファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが見咎（みとが）めたのは、イエスの弟子たちの中に、洗わない「汚れた手」のまま食事をしている者がいるということでした。

ファリサイ派によるイエスへの批判は、イエスご自身の行動だけでなく、イエスの弟子や、イエスが関わっていた人々についての事柄が多かったようです。イエスの弟子たちは、使徒言行録によると「無学な普通の人」（使徒言行録 4章 13 節）であり、ファリサイ派的な敬虔さから程遠かったのでしょう。当時の宗教者の基準からは評価されない弟子たちを、イエスはいつも弁護しました。

預言者イザヤの言葉（イザヤ 29:13）をもってイエスは彼らに答えます。「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとしておしえ、むなしくわたしをあがめている」。

このイザヤの引用の中で「心」という言葉が出てくることに注目してみましょう。ここでの「心」とは、内面性、人の思いの源泉、人を人たらしめているものです。

「その心はわたしから遠く離れている」とは、「その心は神から遠く離れている」ということです。イエスはイザヤの言葉を用いて、「神について語りながらも神から離れている人間の現状」を指摘しました。

ファリサイ派は、神と人との間をつなぐ掟として、律法を重視しました。そして、かえってそれが、人々が生きた神との交わりを見失うものになってしまっていました。イエスが回復させようとしたのは、この生きた神と人との交わりでした。

食前に手を洗うことも市場から帰ったら清めることも、汚れは家の外、あるいは体の外にあるという考え方からきています。その規律さえ守れば人は汚れないですむと考えられていました。食べてはいけないとされたものを食べず、触れてはいけないものに触れなければ、その人は汚れていないことになります。しかし、それらはあくまで宗教儀式的なもの、外面的なものに過ぎません。

イエスは「汚れ」について、表面的なことではない、内面的な領域にまで掘り下げました。「人を汚す」ものは何か。イエスはこう言います。「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚す」（マルコ 7:15）。

「人を汚すもの」、それは「人の中から」、つまり「人間の心から」出て来るものです。それが人を汚し、人を神から引き離すのです。人を汚すものとは「人の内にある悪い思い」であり、そこから出て来る言葉であり振る舞いです。

新約聖書 ヤコブの手紙の著者はこう言いました。「わたしたちは皆、度々過ちを犯すからです。言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です（ヤコブ 3:2）。

また、ヤコブは「舌は火です。舌は『不義の世界』です」と言いました（ヤコブ 3:6）。ヤコブはさらに、「わたしたちは舌で、父である主を賛美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです」（ヤコブ 3:9）と述べて、人間の「言葉の過ち・罪」を指摘しました。

神は人の「心」を、神を愛し人を愛するようにと造られました。神を愛することは、神が愛されたものを愛することでもあります。すなわち、他者を愛し尊敬することが、神を愛することにつながるのです。

ですが、人間はなかなか理想通りにはいかない存在でもあります。ヤコブは、こうも述べています。「舌を制御することは、誰にもできません」（ヤコブ 3:8）。

言葉による過ちや罪を犯さない人は誰もいないと断言しているのです。

生まれてからこれまで一度も、悪い言葉も人の悪口も言ったことのない人は、おそらくいないでしょう。

私たち人間は皆、完全ではない存在です。

清らかに正しく生きていきたいと心の内では願っても、ままならないことも多いかもしれません。

私たちは、お互いが完全な存在ではないことを認め、自分自身が犯してしまった言葉の過ち、人の言葉の過ちを、互いに許し合ひましょう。

そして、そんな私たち人間が、一步一步成長し、神の御心に叶うよう、良い思いを持ち、良き言葉と、神と隣人への愛と賛美の言葉を、口から発していきましょう。

私たちの心の中に、希望の光があります。

私たちは、お互いを許し合い、愛し合いながら、試みの時も喜びの時も共に歩んでいきましょう。

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 申命記 4章 1節—2節と 6節—9節（新共同訳）

¹ イスラエルよ。今、わたしが教える掟と法を忠実に行いなさい。そうすればあなたたちは命を得、あなたたちの先祖の神、主が与えられる土地に入って、それを得ることができるであろう。² あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。わたしが命じるとおりにあなたたちの神、主の戒めを守りなさい。

⁶ あなたたちはそれを忠実に守りなさい。そうすれば、諸国の民にあなたたちの知恵と良識が示され、彼らがこれらすべての掟を聞くとき、「この大いなる国民は確かに知恵があり、賢明な民である」と言うであろう。⁷ いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神、主のような神を持つ大いなる国民がどこにあるだろうか。⁸ またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。

⁹ ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい。

新約聖書 ヤコブの手紙 1章 17節—27節（新共同訳）

¹⁷ 良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。¹⁸ 御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。

¹⁹ わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。²⁰ 人の怒りは神の義を実現しないからです。²¹ だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。

²² 御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。²³ 御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。²⁴ 鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなであったか、すぐに忘れてしまいます。²⁵ しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。

²⁶ 自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。²⁷ みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。

教会讃美歌 202番「東の空」1,2,3節、307番「まぶねの中に」1,2,4節、313番「主はへりくだりて」1,2節、256番「すがたは見えねど」1,2,4節、337番「やすかれわがこころよ」1,2,3節